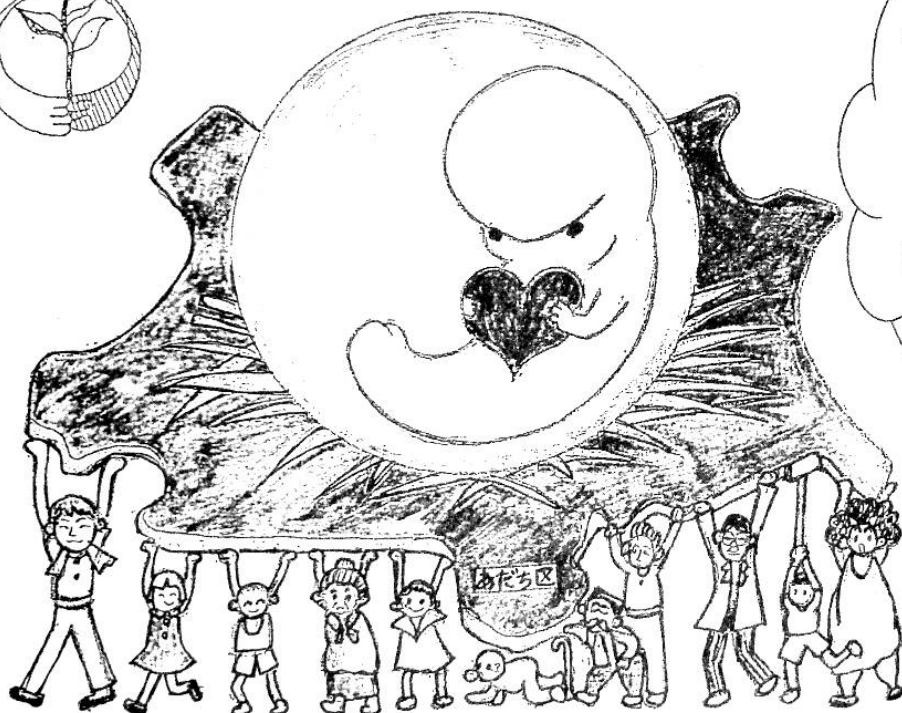
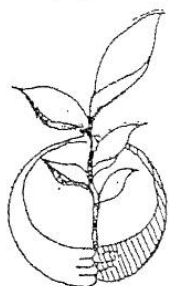


第19回

☆新たな時代を築く子どもたちの育ちを地域の皆さんと一緒に考えてみませんか☆



子どもの
しあわせ
を
考えよう

足立 子ども・福祉フォーラム

日 時 : 2011年2月5日(土) 13時00分~16時30分

会 場 : 足立区役所 庁舎ホール

テーマ : 子どものしあわせを考えよう

主 催 : 社会福祉法人からしだね 発達支援センター うめだ・あけぼの学園

共 催 : 足立区教育委員会 おやじの会

後 援 : 足立区 足立区社会福祉協議会 足立区手をつなぐ親の会

足立区肢体不自由児者父母の会 東京都発達障害支援協会

東京都知的障害児者生活サポート協会

協力団体 : 足立区立小学校PTA連合会 足立区立中学校PTA連合会

もくじ

・ 足立 子ども・福祉フォーラムの趣旨	1ページ
・ プログラム・企画委員紹介	2ページ
・ 全体会・分科会・テーマ・発表者	4ページ
・ 第19回 足立 子ども・福祉フォーラム参加人数	5ページ
・ 全体会 井戸端会議	6ページ
・ 分科会の記録 第1分科会	11ページ
第2分科会	18ページ
第3分科会	23ページ
・ アンケート集計結果	31ページ
・ 感想	36ページ

足立 子ども・福祉フォーラムについて

「足立 子ども・福祉フォーラム」は、当事者や家族が望み、求めている支援を知り、地域機関・団体の関係者、地域住民の協力を得ながら、子どもの育ちを支え、拡げていくためのフォーラムです。参加者自身がそれぞれの立場で考えていくきっかけ作りの場です。

「足立 子ども・福祉フォーラム」は、1992年から1996年まで東京都の地域活動育成事業の助成を受けて行ってきました。助成終了後も足立区教育委員会やおやじの会、関係機関、家族の方々と継続的に企画委員会を設け、毎年運営しています。今回のテーマは「子どものしあわせを考えよう」としました。前回までの話題を継続しつつも、新しい視点を加え、3つの分科会を企画しています。

一人一人の力で未来を築いていきましょう。

☆足立 子ども・福祉フォーラムの趣旨☆

子どもの育ちを考える時にそれぞれの機関や支援者が独立して支援していくのではなく、機関同士が連携していく必要がありました。機関同士の連携があって初めて支援が可能になるという視点からのネットワーク作りというのが目的の一つです。最初は施設間の連携というところから始まりました。

足立 子ども・福祉フォーラムでは、子どもの幸せのための連携を大事にしています。子どもにとって何ができるか、何が大切かを考えた時に地域での人の力を大切にしていきたいと考えています。一緒に子どものために考えていく支援者と連携していきたいです。

「子どもが主役」。それは、障がいがあるなしに関わらず子どもにはわかりありません。足立 子ども・福祉フォーラムでは、警察や消防に障がいのある子どものことを伝えてきました。障がいがあると地域で当たり前で暮らしていく中で、大変なことがあります。それを地域の人にわかってもらいたいと思っています。必要な手助けを当たり前でできる世の中にしていくことがフォーラムの目標です。

足立 子ども・福祉フォーラムは、聞いて学ぶだけの会ではありません。参加者一人ひとりが考え、意見を出し合い、前に進んでいく場なのです。

企画委員の所属は、

「井戸端会議」当事者・おやじの会・手をつなぐ親の会・肢体不自由児者父母の会・足立特別支援学校保護者・うめだ・あけぼの学園卒園児保護者・小学校 PTA 連合会・中学校 PTA 連合会・教育委員会生涯学習課・教育相談センター・小学校校長・中学校校長・中学校特別支援学級教諭・小学校特別支援学級教諭・福祉部障がい福祉課・障がい福祉センター幼児発達支援室・足立区保育課・私立保育園(うめだ「子供の家」も含む)・区立保育園(青井保育園も含む)・区立幼稚園・指定訪問介護事業所・子どもを地域でサポートする会☆キラリン・青少年委員・地域住民と子どもから大人までの多くの機関が関わっています。

プログラム

12:30	受付
13:00	挨拶： 足立区子ども家庭部長 村岡 徳司氏 足立区議会議長 古性 重則氏 足立区教育委員会生涯学習課課長 中村 敏夫氏
13:10	全体会：井戸端会議 「5年後の私たち・僕たち」
13:50	来賓紹介
14:00	企画委員紹介・分科会案内
:10	休憩
14:20	分科会開始
16:05	分科会終了 休憩
16:15	全体会 各分科会からの報告・まとめ
16:25	閉会挨拶：うめだ・あけぼの学園園長 加藤 正仁

企画委員

第1分科会 <初めての学校～“こころ”の準備、はじめませんか？>

- ・秋山 泰明 (足立区立第一中学校)
- ・井田 光子 (足立区立古千谷小学校)
- ・大野加納子 (足立区立青井保育園)
- ・斉藤トミ子 (足立区子ども家庭部保育課)
- ・瀬田 洋 (東京都立足立特別支援学校保護者)
- ・菅野 文子 (足立区立五反野保育園)
- ・谷川さゆり (足立区障がい福祉センター幼児発達支援室)
- ・平岡 一子 (うめだ「子供の家」)
- ・三上まゆみ (うめだ「子供の家」)
- ・縄田 裕弘 (うめだ・あけぼの学園)

第2分科会 <学校に何を求めていますか？～子どもは？親は？～>

- ・江黒由美子 (足立区手をつなぐ親の会)
- ・大澤 康德 (足立区中学校PTA連合会)
- ・大山美紀子 (足立区教育相談センター)
- ・清水 康弘 (足立区小学校PTA連合会相談役)
- ・高橋 将郎 (足立区小学校PTA連合会)
- ・高橋 政夫 (足立区立高野小学校)
- ・平賀 忠良 (おやじの会)
- ・室木 忠雄 (足立区立栗島中学校)
- ・米重 哲彦 (足立区立中島根小学校青少年委員)
- ・渡辺 義也 (親隣館保育園)
- ・渡邊 任子 (足立区肢体不自由児者父母の会)
- ・篠岡 喜子 (うめだ・あけぼの学園)

第3分科会 <輝き続けたい！>

これからの人生を自分たちでどう築いていくか？>

- ・浅川 恵子（足立区障がい福祉センター幼児発達支援室）
- ・稲垣 功一（（株）創カンパニーハートぽっぽ）
- ・助川 隆（おやじの会）
- ・西巻 靖二（おやじの会）
- ・松尾 博（おやじの会）
- ・鈴木真理子（足立区肢体不自由児者父母の会）
- ・高橋 暢行（足立区福祉部障がい福祉課）
- ・高梨 修（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）
- ・新井 義雄（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）
- ・和田 進（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）
- ・山田 尚美（足立区手をつなぐ親の会）
- ・山本眞由美（足立区教育委員会生涯学習課）
- ・加藤ゆ（井戸端会議）
- ・加藤あ（井戸端会議）
- ・金泉（井戸端会議）
- ・佐藤（井戸端会議）
- ・野村（井戸端会議）
- ・阿部 貴史（うめだ・あけぼの学園）
- ・満井 礼子（うめだ・あけぼの学園）

全体会 <井戸端会議>

- ・戸川 ・福島 ・井田 ・山田じ ・佐藤 ・加藤あ ・加藤ゆ
- ・野村 ・小野寺 ・高寺 ・西山 ・金泉 ・菊池 ・山木

全体

- ・新沼 雅美（うめだ・あけぼの学園）
- ・平山厚子（うめだ・あけぼの学園）

全体会・分科会 テーマ・発表者

全体会 子どものしあわせを考えよう

井戸端会議 「5年後の私たち・僕たち」

分科会

第1分科会 <初めての学校～“こころ”の準備、はじめませんか？>

話題提案	秋山 泰明	足立区立第一中学校
	井田 光子	足立区立古千谷小学校
	吉村 惣子	保護者
司 会	斉藤トミ子	足立区子ども家庭部保育課

第2分科会 <学校に何を求めていますか？～子どもは？親は？～>

話題提案	竹脇 礼子	東京都立南花畑特別支援学校
	荘司 章也	足立区教育相談センター
	津布久幸恵	足立区立中川北小学校)
司 会	渡辺 義也	親隣館保育園

第3分科会 <輝き続けたい！>

これからの人生を自分たちでどう築いていくか？>

話題提案	満井 礼子	うめだ・あけぼの学園
	新井 義雄	子どもを地域でサポートする会☆キラリン
司 会	高梨 修	子どもを地域でサポートする会☆キラリン

第19回 足立子ども・福祉フォーラム参加人数

<フォーラム参加者>

ご本人	:	14名
保護者（PTA含む）	:	73名
施設関係者	:	15名
学校関係者	:	2名
学生	:	2名
議員	:	12名
その他 （親の会、一般他）	:	21名
うめだ・あけぼの学園職員	:	27名
企画委員	:	42名
話題提案者	:	4名
フォーラム参加合計	:	212名

保育 ボランティア : 39名

総合計 251名（昨年231名）

<分科会参加者>

第1分科会	65名
第2分科会	49名
第3分科会	50名

<保育児童>

うめだ・あけぼの学園 通園児	:	30名
その他	:	12名
合計	:	42名（事前予約 52名）

<参加者所属先>

手をつなぐ親の会	:	1
肢体不自由児者父母の会	:	1
PTA 連 合 会	:	1
療 育 機 関	:	5
幼 稚 園 ・ 保 育 園	:	8
学 校	:	3
特 別 支 援 学 校	:	1
行 政	:	6
障 がい 者 支 援 団 体	:	2
そ の 他 施 設	:	3
学 生	:	2
そ の 他	:	5

全体会

井戸端会議

「5年後の私たち・僕たち」

全体会

今年の全体会は講義形式ではなく、フォーラムがきっかけで始まった当事者会である井戸端会議のメンバーを中心に「大井戸端会議」をフォーラムの参加者全員で行った。テーマを設けないフリートークが「井戸端会議」のスタイルだが、今回は「5年後の私たち・僕たち」というテーマを設けて行った。

まず「井戸端会議」の活動風景を収めた VTR を上映した。その映像に合わせて「井戸端会議」の簡単な紹介が行われた。

ナレーター：

フォーラムをきっかけにして始まった井戸端会議は、月に一回の集まりを持ち、主に会議・話し合いを行っています。話し合いの他にも、カラオケ、色々なイベントへの参加、勉強会などを企画・運営している集まりです。

今日のフォーラムの全体会では、参加者全員で大井戸端会議をしたいと思います。いつもは、ワイワイガヤガヤとにぎやかな井戸端会議のメンバーですが、今日は緊張していつもの通りに話ができないかもしれません。加えて、言葉で表現することが苦手な方もいらっしゃると思います。数分間の沈黙が続くことがあるかもしれません。そのような時は、見守っててください。井戸端会議で大切にしている「聴く」ことを大切にできるといいと思います。それでは今から始めます。

会場全体で同心円に幾重もの輪を作って座っている参加者。その中心に井戸端会議のメンバーが座っている。ナレーターの合図とともに会場内に音楽が流れ、井戸端会議のメンバーを中心に歌を歌うことから開始した。

「人はみんな誰でも 1人では生きて行けないから
いつもすてきな友達と この手をつなぐのさ
悲しいときも仲間いれば つらくはない
苦しいときも仲間がいれば つらくはない」

歌が終わると、司会から開始の合図。テーマは「5年後の私たち・僕たち」である。歌から始まったが、会場全体の雰囲気は重く、井戸端会議のメンバーも緊張した表情で座っている。

戸川（司会）：5年後は何をしたいと思いますか？井田君どうぞ。

井田：5年後は死にたいと思います。

会場：えー。

満井：本当に？

井田：あの世です。

戸川：（では）5年後は何をしたいと思いますか？

山田：僕の5年後は死んでいます。

会場：えー。なんでー？

満井：どうしてですか？

山田：死にたいから。

会場内が静まりかえる。井田さん、山田さんの発言に対して、何の反応も返ることなく、次の人にマイクが移っていく。

戸川：5年後はどうしたいですか？

小野寺：結婚したいです。マイクの前では言いたくないけど。お母さんに怒られるから。

聞かなかったことにしてください。

満井：そうですか。言ってしまいましたね。

会場：（笑い）

戸川：福島さんどうぞ？

福島：（周囲の人に何かを伝えようとしているが分かってもらえない…）

しばらくの間、福島さんが伝えたいことを理解したために、周囲のメンバーが小さな声で「〇〇のこと？」「△△のこと？」と福島さんに訊ねる時間がある。

戸川：大場君は？

大場：5年後は25歳になるんですけど、事務所に入りたいと思います。事務所に入ってタレントになりたいと思います。アミューズという事務所に入りたいです。そこには、サザンオールスターズという有名な方が入っています。ちなみに私の好きなタレントもそこに入っています。

戸川：5年後は何をしたいと思いますか？

西山：サッカー選手になっています。

会場：(拍手)

高寺：5年後は何やってるかわからないけど…。一応、一般企業に勤めることが目標です。

満井：一般就労が目的(なんですな)。

佐藤：ディズニーランドに行きたいです。モーニング娘のライブに行きたいです。

野村：1人暮らしをしているのですが、5年後は、もうちょっと余裕のある生活をしたいです。それと、みんなの役に立てることをやりたいです。こうやって、井戸端会議を開いてくれる方々の助けがあるからやってこれました。困っている人がいたら自分も助けたいです。自分から「大丈夫ですか？」という言葉をかけてあげたいです。

金泉：5年後は、鉄道が好きなので、鉄道ファンよりも職に就きたいと思います。

通常の井戸端会議とは違って、Q&A形式の会話となり、話の間でボケたり突っ込んだりする様子が見られず、メンバー全員が緊張した中で司会の戸川さんの質問に答える調子で進んでいく。会場自体も聞き入る形になり静かな雰囲気が進んでいく。しばらくメンバーの中で打ち合わせがあり、会場の参加者にも意見を求めることになる。

戸川：会場の皆さんにも聞きますね。5年後は何をしたいですか？

マイクを持ったメンバー二人が会場内を歩き回り、参加者に質問をして歩く。マイクを向けられた参加者は驚いたり、照れたりしながらも、メンバーの質問に丁寧に答えてくれる様子が見られた。

参加者1：5年後の自分は、結婚をしてかわいい子どもを持ちたいです。

参加者2：今、仕事をしているので5年後もこの仕事をしていけたらいいと思います。

参加者3：以前関わっていた皆さん(井戸端会議の人たち)が立派にとっても成長していてすごいなあと思っています。私も皆さんに負けなくらいすごいなあと思える人になりたいです。

参加者4：うめだ・あけぼの学園で働いているので、今年卒園する方には5年後に「お帰り」と言いたいです。今、0歳の子は5年後の成長を見ていたいと思います。

参加者5：5年後に息子に先立たれては困るので、5年後も息子を育てながら、孫の面倒でも見られたらいいです。

参加者6：5年後、今よりももっと元気になって、もっともっと若返って、私もアミューズに入ってデビューできるようになりたいです。

参加者7：5年後は、今の仕事を続けていきたいです。今、子どもが3人いるのですが、もう1人くらい産めたらいいと思います。

参加者8：今、足立区が行っている子どもに対する施策を重点的に行っているんで、5年後、元気な子どもたちがいっぱいになるといいと思います。

参加者9：自分の子どもが小学校に入るので、元気な子どもになってほしいです。そうした施策を応援していきたいです。

参加者10：5年後は70歳になっていないです。会社を経営しながら、キラリンのやフォーラムの活動を継続し、バリアフリーの社会を目指して頑張っていきたいと思います。

参加者11：5年後はまだわかりませんが、特別支援学校を出ているので、働いていたいと思います。

参加者12：5年後は、AKBに入っています。結婚は、3年後にします。

参加者 13：今のまま変わらず子育てをしたいと思います。

参加者 14：子どもができて、いいパパになってるといいと思います。

参加者 15：小学生のころを知っている方が井戸端会議で発言している様子を見て、立派になったなあとうれしく思いました。5年後は、子どもたちもお母さんたちも学校にきたら元気になれる学校にしていきたいです。

会場が少しずつ和やかな雰囲気に入れられ、井戸端会議のメンバーの緊張も少しずつほぐれてきたところで時間になる。最後に最初の歌を参加者全員で歌って終了とする。

分科会

第1分科会：「初めての学校～“こころ”の準備、
はじめませんか？」

第2分科会：「学校に何を求めていますか？
～子どもは？大人は？」

第3分科会：「輝き続けたい！
これからの人生を自分でどう築いていくか？」

第1分科会 初めての学校～“こころ”の準備、はじめませんか？

<司会> 齊藤トミ子（足立区子ども家庭部保育課）

<企画委員>

秋山泰明（足立区立第一中学校）

井田光子（足立区立古千谷小学校）

大野加納子（足立区立青井保育園）

齊藤トミ子（足立区子ども家庭部保育課）

菅野文子（足立区立五反野保育園）

瀬田洋（足立特別支援学校保護者）

谷川さゆり（足立区障がい福祉センター幼児発達支援室）

平岡一子（うめだ「子供の家」）

三上まゆみ（うめだ「子供の家」）

縄田裕弘（うめだ・あけぼの学園）

<話題提案者>

秋山泰明（足立区立第一中学校）

井田光子（足立区立古千谷小学校）

吉村惣子（保護者）

<記録> 北浜千枝子（うめだ・あけぼの学園）

<参加人数> 65名

<分科会要旨>

障がいがある無しに関わらず、誰もが迎える就学について、日頃思っていることを話し合い、皆で意見交換をする場にしたい。

1. 話題提案

秋山泰明：特別支援学級の担任。就学のシステムについて説明。（別紙参照）

少子化になっているが、特別支援学級・特別支援学校の在籍数が増加しており、7～8年前の倍近くになっている。人数の少ない特別支援学級ならば友達関係がうまくいくお子さんもいるが、通常学級と同じような人数の特別支援学級もあり、現実では大勢の中で学ばねばならなくなっている。途中で通常学級から特別支援学級に転入したくても入れず、電車やバスを使って他学区に行くケースもあるなど、少人数指導が難しくなっている。通常学級では、言語指示で動けるお子さんでないと授業についていくことが難しいと思われる。文部科学省に定められた教科内容があるため、つまづいている生徒がいても次に進まざるをえない現状があり、ついていけない生徒が生まれやすい。その点、特別支援学級は、各クラスで実態に基づいた内容で授業を行ってよいので、クリアできるまで長く指導もできる。ただ、高校に行きたい時は、内申書がないので受験には不利である。進路は95%が特別支援学校、残りの5%が専門学校・サポート校などである。特別支援学校の生徒はそのまま特別支援学校高等部への進学がメイン。また、特別支援学校の高等部に行く場合は、愛の手帳を持っている必要がある。

井田光子：通常学級の担任を長くした後、現在は特別支援学級の担任をしている。息子に障がいがある。

○子育て上のエピソード

- ・入院した時に「学力が低いこと・肢体不自由はそんなに問題ではないが、二次障がいが出ている。本当に通常学級に戻っていいのか」と言われたが、分からずにそのまま戻った。その後、通常学級から転級した。振り返ると、確かに二次障がいが出ていたと感じた。
- ・小学校での宿泊学習で、毎回「すみません、うちの子をよろしくお願いします」と頭を下げて見送っていた。中学で特別支援学級に通うようになり、宿泊学習の日に「行ってらっしゃい」と初めて言うことができた。「うちの子だけ特別なのではない」と笑顔で見送ることができたことを、息子も自分自身も喜んだ。特別支援学級に入れて良かったと感じた。
- ・高校は、知的障がいの墨田特別支援学校に行った。全体で出かける時、息子だけ車いすであることを見て、「肢体不自由の特別支援学校に入れた方が良かったのか」と感じた。学校生活を楽しんでいたが、判断に悩んだ瞬間だった。

○教員としてのメッセージ

- ・通常学級の入学説明会で、年長児の保護者向けに話すこと

「自分の名前は読めるように」：自分の持ち物はシール（イラスト）ではなく、名前を読めるようにな

っていてほしい。書ける必要はないが、読める字を増やした方がいい。

「着替え」: 5分休憩でトイレと着替えを済ませる必要がある。誰かに手伝ってもらわなければならない、では難しい。

「食事」: 45分で配膳から片づけまで行う。食べる時間は20分程。この時間内に食べられないと困る。時間があれば食べられる、ではなく、時間を意識した生活をしてほしい。

「排泄の自立」: 和式トイレがうまく使えてほしい。通常学級ではトイレの介助はしない。きちんと拭く・流すも身につけてほしい。

「困った時の意思表示」: 例えば、具合が悪い時にすぐに担任が気づけるとは限らない。「忘れ物しました」「鉛筆貸してください」など、困った時には「困った」と、集団の中での意思表示ができるようになってほしい。

・特別支援学級と特別支援学校との違いとしては、「時間で動く」ことが挙げられる。特別支援学級は通常学級との併設が多いため、集団行動ができることが必要である。特別支援学級にするか、特別支援学校にするかという基準として、「手をつなぐ親の会」の資料にあったものが参考になる。「必要な時に必要なケアをしていないと大人になって困る」。今、我が子にとって必要なものを重視している場所に入れることが大切だと感じる。排泄・コミュニケーション・学力・・・その時期に必要なことをしないで、二次障がいが出てきたら辛い思いをするのは親と子である。「今、目の前の子に何をすることが将来のためになるのか」を考えてほしい。

吉村惣子

娘は現在、足立特別支援学校の3年生、自閉症で知的障がいがある。あしすとに2年通い、保育園に1年通った。就学の際、核家族で妹もいるので、近い学区内の通常学級にしようと思った。判断は特別支援学級。保育園では先生や友達によくしてもらい、みんなと一緒に通常学級に行かせたいと思ったが、校長はあまり理解がなかった印象がある。「理解がない学校に通わせるのはよくない」とあきらめたことは、今思えば正解だった。それぞれ子が違えば求めるものも違うし、人と自分の評価は違うので、学校見学は大事と感じる。先生には異動もある。また、先輩になる子ども(在校生)の観察もした。校長と副校長、担任間のチームワークや、特別支援学級と通常学級の先生同士の理解や連携の様子、在校生の関わり方や理解の様子、これらが大きく関係している。まず自分の子どもを知ること、冷静に判断することが大切である。子どもの居心地の良さ、無理しないで自然体でいられることを重視した。親が子どもを思うあまり、成長を望み、無理をさせることがある。無理をさせることと努力することは違うと思っている。冷静に判断することは、簡単なことのように難しい。不安な気持ちがあつたり悩んだりするのは当たり前、必ず周りに応援してくれる人がいる。自信を持って一歩一歩進んでいってほしい。

2. 質疑応答・意見・感想

Q. 二次障がいとは？

A. (井田) その場をつくろうためにごまかすこと。精神的にのびのびできていない。学力はそんなに低くないのに常に人目を気にしている。できないことは無理してやらなければ、周りの人がやってくれるので、よっぽど自信がないとやらない。知的や身体の障がいは別に、精神的に参ってしまうこと。大人とは関係が作れるが、友達関係が作れない。

司会 無理せず自然に、ができないと二次障がいになりやすくなるのではないか。

Q. 孫が、発達障がいと診断されている。知的な遅れがないため、愛の手帳が貰えない。その場合は特別支援学校にあがれないなど不利になるのか。

A. (秋山) 愛の手帳を持っていないケースは、自分のクラスのうち1/3程いる。中学3年生の受験直前に取りに行ってもらおう。特別支援学級にいるという説明をすると取れることもある。それでも取れないと、病院の診断書をもってきて受験する。特別支援学校高等部では、知的に遅れがないと、「精神障害者手帳」を取るよう勧められ、それで就職する。雇用の法律上、愛の手帳を持っている生徒を、会社側も雇用したいという現状がある。

Q. 特別支援学級と特別支援学校は、文部科学省の定めと違う別の勉強をしているのか？普通の中学校に行くのは困難なのか？

A (秋山) カリキュラムが違う。例えば、中学卒業の時までに「関数・ルート・方程式」などはやらない。生活の中で使っていないもの、それ以外に教えることがたくさんある。しかし、試験には出題されるので点数が取れない。明らかに普通の高校の試験を受けるのは難しいと思う。ただし、東京都はいろいろ準備をしている。例えば、足立東高校の「チャレンジ校」と呼ばれるものがその1つ。30分授業や、入試は内申書やテストではなく、作文や面接といった「アピール」で行われる。そういうところに受験は可能で入学の可能性がある。サポート校や、定時制の高校で卒業資格を取るケースもあり、そこを卒業して、大学へ行くケースもある。高校で真面目にやれば、評価は高くなり、推薦入試で大学へいく可能性はある。

Q. 小学校で、通常学級から特別支援学級に行く場合があるようだが、特別支援学級から通常学級に行くケースはあるか？

A (井田) ゼロではない。特別支援学級や個別で教えたことで、通常学級に戻ったケースも聞いたことがある。

A (秋山) 何を求めるか、が大事に思う。小学校で特別支援学級、中学校で通常学級、高校で特別支援学校を選んだケースがある。この子どもは「大勢の仲間の中で過ごしたい」という気持ちを大事にしていた。ただ、勉強面は遅れる。勉強以外の同じ年齢の仲間と過ごすことを選んだ。それができる子ならあり得るが、数は少ない。

○意見・感想

(秋山) 17年間、特別支援学級で教えている。通常学級で教えている時は、進路については、偏差値と通信簿で「入学できるかどうか」で決めていた。今は、目の前の子の3年後を考えている。働いている姿を想像しながら指導している。通信簿がオール1でも高校に入ろうと思えば入れる時代になっている。しかし、入学して何がその子にプラスになるのか？入学することではなく、「どういう生活をさせるか」を考える。特別支援学校では、1年生から現場実習・追跡調査・アフターケアを行っている。学校で伝えているのは、「あいさつ」「身辺自立」「困った時に助けを求められるかどうか」ということが多い。通常学級よりも、特別支援学級の生徒の方がしっかり挨拶できる。挨拶できない通常学級の生徒は、社会に行けば自分で気づいて修正できる。特別支援学級の子たちは自分で気づけない。教えてあげなければならない。学校で勉強したことは、実際には使っていない。なぜ方程式を勉強するのか？なぜバスケットをするのか？それは、頭の訓練・からだ作り。方程式ができなくても生活できる。「自分の事を自分でやる」、それが特別支援学級で大切にしていることである。

司会：井田氏・秋山氏の言っていることは、つながっている。小学校に入る前の段階として求められていることがずっと大切になっている。

(井田) 通常学級の担任がどれだけ障がいのことを理解をしているのかという問題があるが、今の世の中、研修会で知識は得られる。例えば、「自閉症は刺激が少ない方がいい」ということは知っている。「しかし！」と言いたい。掲示物なしではやっていけない。知っていても学級経営に活かしていけない。親が、他のお子さんにも我が子の障がいについて言っていていいですよ、と言ってくれればみんなに言える。しかし、「うちの子は普通です」と親がいつまでも言っていたら、学校の対応も遅れる。担任の知識の無さもあるが、求められてもできないこともたくさんある。「自分の子にはこういうポイントで関わってください」ということは、学校に言ってもいい。しかし、要求するべきことではないこともある。相談はするべきだと思うが、まずは親が我が子をきちんと理解することが大切である。すると、周りが自ずと理解してくれるようになるのではないか。

(吉村) 保育園は、現在のように障がい児枠ではなく、当時は妹が通っていたから通えた。最初の保護者会で迷わず娘の話をした。あしすとに通っていて、「うちの子はこういう子、言葉ではコミュニケーションとれません」と言った。担任は下を向いて「あれれ？」の顔をしていた。それを見て、「言っちゃだめなの？」と感じた。その後、担任に「普通は言わない、担任からはお話しできない」と言われた。本当のことを言ったお蔭で、みんなが声かけてくれる。「大丈夫よ」と応援してくれる。「あしすとに行ったことあるよ」と声をかけてくれるなど、いつも心強かった。つつい小学校は通常学級でも通えると思った。でも先輩ママに「保育園で応援されても、小学校では手伝ったり見守ったりしてくれないよ」と言われた。今思えば、それが当たり前だと思う。

Q. 特別支援学級の希望者が、増えていると聞くと聞くと、どのように決定されるのか。

A(秋山)前は学区域があった。自由選択になったと同時に特別支援学級も学校選択できるようになった。その結果、偏りが発生した。交通の便の悪さなどで、ある学校に集中した。1学年36名にもなった学校もある。それで、各校ごとに定数を決めた。各学校に近いお子さんから入れていくため、8校中6校が定員を超え、遠くの学校に行かざるを得ないケースもある。

(秋山)小学校に入ると、他の子が面倒を見られないという話があったが、小学校から中学校でもある。小学校は学級担任制で、仲のいい子はクラスが同じになることもある。一方、中学校は教科担任制である。一つの授業が終わると教師が変わる。また、部活が始まると自分のことで精いっぱいになる。面倒を見てくれる子がいなくなっていく。2年から3年生で勉強が難しくなり転学のケースや、居場所がなくなり不適應を起こすケースもある。

Q. 通常学級で自分の障がいオープンにしたことでいじめにあったなどのケースはあるか？

A(井田)障がい原因ではなかった。子どもは受け入れが良い。通常学級のお子さんが特別支援学級に転級し、トラブルを起こすこともある。大人が間に入って対応している。多少の接点の中ではけんかも当然ある。ずっと親がそばにいて見守っては暮らせない。

感想

(南花畑特別支援学校の教員)話を聞いていて、居場所が大事と強く思った。本当に安心できる場所は子どもが教えてくれる。知的に高い低いの問題でなく、本当は先生と関わりたいのに口で言えるはずなのに言えない子がいる。社会の中でその子がどう育っていくのか、無理せず自然体でいられる場所はどこなのか、を大切にしてほしい。

(秋山)我が子の障がいについて、担任には話してほしい。周りが知っていないと、「変な人」と捉えられてしまう。「どうしました？」と対応すれば済むことでも、わからなければ大きなことになる可能性もある。

(井田)怒りやすい子がいるが、担任が知っていれば、「いらいらしちゃうから・・・」と説明するなど、大きな問題が起こる前に対処できる。トラブルがあった時、怒られるのは、きっかけを作った子ではなく怒った子になる。失敗を怒られることで、もともとの障がいではないことが出てきてしまう。担任に話しにすれば学校内のコーディネーターやスクールカウンセラーにも相談・連携が図れる。スクールカウンセラーは週1回程度の来校が多く、コーディネーターは学校内の教員が兼任している。

2. まとめ

子どもを中心に、この子にとって今、何をすべきかが大切である。身辺自立・思いを伝えられること等、小学校でも中学校でも同じことを求められている。社会参加をする上で、何を手助けすればよいのか、を考えて学校選びをしていけるとよい。

足立 子ども・福祉フォーラム 第1分科会 資料

	通常の学級	特別支援学級（小・中）	特別支援学校（小・中学部）
学級の編成基準	1学級 40人 小学1年生は39人 学級	1学級 8人	1学級 6人 重度重複学級の場合は 3人
担任の人数	1学級1名	学級数+1名	1学級1～2名
学区域 特徴	学校選択制度 区内に 小学校72校 中学校37校 ☆ 地域の学校に通学 できる。	学校選択制度 区内に 小学校に18校設置 中学校に 8校設置 自宅近くに設置校がない場 合が多い。 原則自力登校	学区域 あり 荒川以北&綾瀬川以西 …南花畑 荒川以南…墨田 綾瀬川以東…水元 ☆スクールバスあり ★地域とは離れた所に通学。
入学の方法	選択希望票を提出 希望者が多い場合は 希望が通るとは限らな い。	就学相談をうける必要がある 。就学支援委員会に諮り、就 学が決定されていく。 最近では生徒数の増加が激し く、入学定数を決め、定数以 上は入学できないようになって きた。 時には、中学校の場合、自 宅近くの学校に入学できない こともあるかも？	就学相談をうける必要があ る。 就学支援委員会に諮り、就学 が決定されていく。
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同一年齢の集団 ・ 20人から40人位の 大きな集団の中で学習 を進めていく。 ・ 担任は1人なので、言 葉による指示が多い。指 示を聞いて動ける必要 がある。 ・ 担任が1人なので児童 ・ 生徒一人ひとりに、目 が行き届きにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異年齢集団が一つの教室で 学習 ・ 1学級8人の基準。例えば 17人在籍していると3学級 となり、担任は3+1で4名 となる。つまり17人の児童 ・ 生徒を4人の担任が指導。 つまり、教師の目が行き届き やすく、きめ細かな指導がで きる。 ・ 集団の規模が小さいので、 大きな集団ではなじめない生 徒も小規模な集団の中で活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同一年齢で学級を編成。 1学年が2～3学級に分 かれ る。 ・ 特別支援学級よりも細か な指 導ができる。（個別学習） ・ 多くの授業は学級を単位と し て学習を進める。 ・ 重度重複学級も設置してい るので、障がい重い場合も 対応できる。

	通常の学級	特別支援学級（小・中）	特別支援学校（小・中学部）
		<p>できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科によっては（国語・算数など）学級をさらに発達段階に応じて4～6名の小グループに分け指導。 ・音楽・図工などは全体で指導。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語、算数はグループ別 ・体育、音楽、作業、美術は学年で授業。
課題	小一プロブレム	<ul style="list-style-type: none"> ・学級の児童・生徒数の増加 少人数での指導が難しくな ってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒数の増加 教室不足が起きている。

第2分科会 学校に何を求めていますか？～子どもは？大人は？～

＜司会＞渡辺義也（親隣館保育園）	
＜企画委員＞ 高橋政夫（足立区立高野小学校） 室木忠雄（足立区立栗島中学校） 江黒由美子（足立区手をつなぐ親の会） 高橋将郎（小学校 PTA 連合会 東綾瀬小学校） 大澤康徳（中学校 PTA 連合会 栗島中学校） 篠岡喜子（うめだ・あけぼの学園）	渡邊 任子（足立区肢体不自由児者父母の会） 米重 哲彦（足立区立中島根小学校青少年委員） 平賀 忠良（おやじの会） 清水 康弘（足立区小学校PTA連合会相談役） 渡辺 義也（親隣館保育園） 大山 美紀子（足立区教育相談センター）
＜話題提案者＞ 竹脇礼子（南花畑特別支援学校 特別支援教育コーディネーター） 津布久幸恵（足立区立中川北小学校 特別支援教育コーディネーター） 平賀忠良（保護者） 渡邊任子（足立区肢体不自由児者父母の会） 荘司章也（足立区教育相談センター 教育相談担当係長） ＜説明者＞江黒由美子 ＜報告者＞米重哲郎	
＜記録＞山田雄一（うめだ・あけぼの学園）	
＜参加人数＞49名	

＜分科会要旨＞

3. 話題提案

竹脇礼子（南花畑特別支援学校 特別支援教育コーディネーター）

- ・学校と施設の関係があるが、保護者と学校との繋がりが薄い。学校の広報不足もある。
- ・連携についての説明、エリアネットワーク、足立区のセンター校としての役割がある。
- ・就学について 就学支援シート（チューリップシート）と就学支援ファイルの説明を行った。
これらを元に、個別の支援計画を作成している。就学前機関との一貫性を目指している。
- ・個別の教育支援計画／個別の教育支援計画作成のための児童・生徒の様子（保護者記入）
支援計画の確認について：支援機関の支援にチェックのない人については、教員側も意識をしてみる。
- ・個別指導計画（教科の目標、手立て、評価）を作成する。
上記、二点は、どの支援学校でも取り組んでいる。
- ・支援学校に入学後に、地域との関係がなくなることが、保護者の心配である。
→副籍制度 地域の学校との交流を行っている。全児童の 40%の割合で利用している。地域指定校の遠足に参加しているケースもある。
交流を通して児童に声を掛けられることもあり、保護者も励まされるが、お便り交換で留まってしまうこともある。
- ・コーディネーターの役割。保護者の方の要望に応じることできる。学校外のことにも対応している。
（例：福祉事務所に同行して、受給者証の取得を行う）気軽に相談をして欲しいと思っている。
- ・専門家訪問相談として、小中学校に出向くこともあり。通常学級に在籍していても、現在はよいが、今後の難しさを感じることもある。
- ・適切に支援をされてきた生徒は、就労は安定しているが、支援を受けられてこなかった生徒は、就労後に問題が出てくることもある。将来の姿をイメージして対応していくことが大切。
- ・学校見学を行っているので、児童生徒の様子を見て頂きたい。

津布久幸恵（足立区立中川北小学校 特別支援教育コーディネーター）

- ・中川北小学校での特別支援教育について（区内小中110校が存在、特別支援学級がない学校としての立場）
- ・就学時の健康診断を行う。
- ・新一年生保護者会（就学相談を希望する）を開催している。

・確認事項(保護者から学校に対して)

- 入学予定校の就学相談・特別支援教育の情報を得る。
- いつ、誰に、どのように相談したらよいかを確認する。
- 入学後、担任との連携の仕方について、相談する。
- 特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーとの懇談。
- 特別支援シートを参考に個別指導計画をたてることを依頼。
- 学校でできる支援、関連機関で行う支援などについて明確にする。

・チューリップシート

- 学級編成をする際には、多くの情報があった方がよいので、学校としてはシートを出して欲しい。
- チューリップシートを出したお子さんについては、個別支援計画を立てて情報を引き継いでいく。
- 学年ごとに一年間の振り返りをする。

・特別支援コーディネーターは、教員が研修を受けながら任務を担っている。

・校内体制

- 特別支援教育委員会を設置している。
- 学校での配慮や支援を要する児童に対して下記の支援を行う。
① 学習支援 ②生活指導支援 ③家庭支援 ④日本語指導 ⑤身体的配慮

・個別指導計画については、周囲の機関との連携を行いながら計画の立案を行う。

・時間的な制約があり対応できないこともあるが、まずは学校に相談をして欲しい。

平賀忠良(保護者)

- ・自分のお子さんの事例を通じての報告。
- ・お子さん：愛の手帳4度、軽度発達遅滞 診断名がちょっと分かりにくい。グレーゾーン。
- ・チューリップシートを作成して提出。「自分の気持ちをことばにすることが苦手」と伝えている。
- ・友達からの関わりの中で、学校に行きたくない、授業中に頭が痛いということがある。
- ・コーディネーターに相談し、相手の生徒への指導、本児の良さの評価、苦手さへの取り組みの指導につながった。保護者の相談を通じて、本人も前向きに取り組んでいる。
- ・相談はコーディネーターの先生にしている。相談をすることで保護者として安心できることが増えている。担任は年度で変わるがコーディネーターの先生は変わらない場合もあるので、活用を勧める。

荘司章也(足立区教育相談センター 教育相談担当係長)

- ・教育上のどんな相談でも受ける。現在3箇所あるが、鹿浜分室が統合されるので、2箇所になる予定。3歳～高校生、保護者が対象。
- ・一番の相談は、不登校(4割強 全相談中1056件中428件が不登校。発達は278件) 小学校では、発達に関する相談が半数近い。発達に関する相談が増えている。
- ・療育機関ではなく、相談機関である。困っている保護者に向けて、問題をどのように理解していけば良いのかを考えていく。検査の結果や行動観察の様子に基づいて説明する。面接を通じて、子どもの発達の理解を行う。
- 発達支援ケースの場合、学校の方と連携をとってよいかを確認し、学校との連携をする。
- ・相談は、終結までに20回位の面接を重ねる。
- ・学校の先生からの相談751件あった。(電話相談を含めて)先生の悩みも大きい。222件の面接を行っており、405回の学校訪問を行っている。
- 学校、保護者、相談室の三者の関係ができた時に、よい方向に進んでいく。

渡邊任子(足立区肢体不自由者父母の会)

- ・アンケートを元に報告。(通常級から特別支援学校に移ってきたお子さんからの聴取)
- ・保護者に向けて
「自分の意見・思いが全て正しいと思うな／要望は全て叶うと思うな／思いを溜めこむな」
要望の伝え方について
立場が異なるので、同じ意見はあり得ない。相手の意見を聞き、お互いに歩み寄る姿勢が大切。

要望はとりあえず伝えるが、全て叶うわけではない。何を優先させるか、要望に順位をつけること。

相談

相談したり、愚痴ったりすることも大切。話すことで、冷静に考えられ、打開策を発見できる、味方を得られる。

相談相手：家族、友人、先輩の保護者（手をつなぐ親の会・肢体不自由児者父母の会）

コーディネーターの先生、教育相談センター

- ・学校に向けて：要望に対して、できる・できないだけではなく、その子にとってどの様なことなのか？
どの様な視点で提案しているのかを説明して欲しい。
ひとつの答えがあるわけではないので、しっかり聞く耳を持つことも必要。
- ・保護者と教育者・指導者の面談は続いていく。教育、支援、環境を、考える話し合いなので、自分のエゴを捨てて、目先のことにとらわれず、子どもの将来を見据えて歩み寄る努力を忘れないこと。

2. 質疑応答

Q)「発達障害」と診断されて間もない子を持つ保護者。学校との相談を重ねて、良い関係を築けた。学校側としては、情報が欲しい、どのように対処して良いのかを求めている。今後を考えると今からでも相談機関を利用した方が良いのか？

A) 学校には、保護者から、本人の強みや弱みは伝わっていると思われるが、学校の状況や体制からは十分に対応できないこともあるのでは？

相談機関を利用することによって、学級観察を通じて、学校で具体的に対応できることが提案できると思われる。

Q) コーディネーターの先生は、長いスパンで関わられるようになっているのか？

A) 研修は受けているが、担任を持ち、係として行っている部分もあり、時間的な制約もある。

専門性のある教育相談センターの活用で、解決できることもあり。スクールカウンセラーの利用も可能である。

グループワークより

1. 現場の先生方と良い関係を作っていくことが大切。
2. 学校に何を求められているのか？ 現場の先生が困っている場合は、管理職に相談する。
子どもが困っている場合は、担任の先生にまずは、相談する。
3. 都立の特別支援学校計画についての話。通常学級にいる子どもへの支援が急務になる。
学校に入ってから、援助を受けられるサービスがあるので、活用するとよい。
4. いろんな人と連携をしていくことが大切。要望を伝えて続けていくことが大切。

第3分科会 これからの人生を自分たちでどう築いていくか？	
＜司会＞ 高梨修（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）	
＜企画委員＞ 浅川恵子（足立区障がい福祉センター幼児発達支援室） 稲垣功一（（株）創カハニハートぽっぽ） 加藤あ（井戸端会議） 加藤ゆ（井戸端会議） 金泉（井戸端会議） 佐藤（井戸端会議） 野村（井戸端会議） 新井義雄（子どもを地域でサポートする会☆キラリン） 高梨修（子どもを地域でサポートする会☆キラリン） 和田進（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）	西巻靖二（おやじの会） 助川隆（おやじの会） 松尾博（おやじの会） 鈴木真理子（足立区肢体不自由児者父母の会） 高橋暢行（足立区福祉部障がい福祉課） 山田尚美（足立区手をつなぐ親の会） 山本眞由美（足立区教育委員会生涯学習課） 阿部貴史（うめだ・あけぼの学園） 満井礼子（うめだ・あけぼの学園）
＜話題提案者＞ 新井義雄（子どもを地域でサポートする会☆キラリン） 満井礼子（うめだ・あけぼの学園）	
＜記録＞ 佐藤千瑛（うめだ・あけぼの学園）	
＜参加人数＞ 50名	

＜分科会要旨＞

分科会の流れ（司会）

「輝き続けたい！これからの人生を自分でどう築いていくか？」というテーマに沿って、ディスカッションを行う。これまでの企画会で、本人さんたちが輝き続けるために、一緒に考えたり話し合える「仲間」、触れ合ったり知り合ったりする「場」の必要性やそれを支えてくれる人（担い手、応援団）が必要なのではないかという話題が出た。また、フォーラムがきっかけで始まった「井戸端会議」や先進的に活動を行っている「子どもを地域でサポートする会☆キラリン」の活動について話題提案をしてもらう。そこに参加している本人さんたちが、どんなことを必要としているのか、サポートを必要としているのか、必要とするとすればどの様なサポートを必要としているかを聞いていき、ディスカッションを行いみんなで考えていきたい。

1. 話題提案

満井礼子（うめだ・あけぼの学園）

＜井戸端会議とは・・・＞

自分たちがやりたいことを自分たちで話し合っ決めていく集まりである。また、障がいの有無や障がいの種別に関係ない集まりである。

＜井戸端会議のはじまり＞

発足のきっかけは6年前のフォーラムであり、当事者本人ではない周囲が「こんな風に思っているのでは・・・」と本人たちがどのように考えていることを直接聞いてみる機会を得た。その頃は本人が話したいことというよりは周囲が聞きたいことを聞くQ&A方式で行った。しかし、井戸端会議の回を重ねる度に周囲が聞きたいことではなく、本人たちが話したいことを話し、どんなことを話しても良い集まりに方向転換していった。ところが実際、気を遣ったり、緊張したり、よい人になりすぎたり、周囲の要求に応えすぎたり、正誤を確認したり、周囲の望む答えを探したりと本人たちの考えを話してもらうことは難しかった。その中で、本人たちが話したいことは本当に何なのか、どうしたら話したいことを話せる集まりになるのか探った。

＜井戸端会議の進化＞

本人たちが話したいことを話せる集まりにするために。また、周囲が敷いたレールの上を走るのではなく、自分たちでレールを敷くために、井戸端会議の持ち方を変えた。

- ・時間：昼から夜へ（本人たちが参加しやすい、本人たちが集まりやすい時間帯に設定する）
- ・頻度：年数回→月1回へ
- ・必須アイテム：お菓子とジュース
- ・必須役割：ボケと突っ込み
- ・必須ルール：ルールがないこと
- ・ゆったり、のんびり、リラックスした雰囲気、そして、時間が掛かることを良しとする。

〈井戸端が大切にしていること（本人たちのアンケートから）〉

何を話してもよいところ。モットーがないことがモットー。枠をはめないこと。人の話をよく聞くこと。付き合い。自分でやりたいことを自分で決めること。友情。

〈井戸端会議の活動内容（本人たちのアンケートから）〉

話し合い=会議、勉強会、イベント参加やそのための練習、カラオケ、ボーリング、お花見。

〈参加する理由（本人たちのアンケートから）〉

好きだから、楽しいから、嬉しいから、知人の薦め、将来にむけて、日時を知っていたから、友達が欲しいから、友達が増えるから、話しを聴いてくれる人がいるから、自分には想像もつかない考えを聞けるから。

〈井戸端会議での最近のエピソード〉

- ・カラオケに行ったとき、他の車いすの人に対し、トイレに行けないから参加しないのではないかと心配し、自分も不参加にした車いすのメンバーがいた。
- ・余暇の過ごしとして井戸端会議があるから仕事を頑張れると話すメンバーがいた。
- ・井戸端会議のメンバーが増えてほしいと思いつつも、「ただ単に人が集まればいいわけではない、誰でもいいわけではない」とメンバーからの発言を受けて、人とのつながりの大切さを感じた。
- ・井戸端会議に行きたいが、移動ヘルパーが利用できなくなり（利用できる時間を勘違いしていた）参加ができなくなるからどうしようかというメンバーからの話題提案があった。話し合いをして、その人の家の近くで集まることにした。
- ・企画会で井戸端会議のメンバーにアンケートをしたらどうかという意見が出たため、井戸端会議で提案した。すると、メンバーから逆に企画委員に対し、自分たちのことをどれくらい知っているかを聞くためのアンケートをしたいという意見が出た。→アンケートを作成し、実際に実施した。
- ・フォーラムの懇親会にみんなで参加したいが費用をどうするか話し合った。費用の負担が大きく、参加することが厳しい人がいる中で、メンバー全員で参加したいので、「お金を稼ごう」との意見が出た。青井の兵和通り商店街フリーマーケットに参加し15525円の収入を得た。その結果、全員参加することができた。

〈井戸端会議をサポートするために必要なこと〉

- ・人として平等な立場でいること。
- ・開催する日時、場所、車いす利用についてを確認する。
- ・費用を下げる。（1回100円程度）
- ・本人たちが参加できる手段や条件の確認を行う。
- ・メンバーは、困ったところだけ助けて欲しいと思っており、困っていないところはそのままにして欲しいと思っている。そのため、困っているかいないかを聞きながらサポートをしていく。

〈井戸端会議を通して気付いたこと〉

人は1人ひとり全く違う人間であり、親子でさえも違う人間であり知らないことはたくさんあること。だからこそ、「待つ」「聴く」ができる。偏見の中で生きているのは私たちであり、だからこそ可もなく不可もなく、ありのままの等身大で見る、見られる事が嬉しい。

サポートとは困っていることを助けてもらうこと。誰でも、できないことは手伝ってもらい、できないことは手伝ってあげたい。

〈話題提案〉

- ・若いメンバーを増やしていくためにはどうしたらよいか。（本人さんより）
- ・企画会において「誰かに決められたことではなく、自分たちがやりたいと思っていることはたくさんある。ただし、自分たちだけではできないことがあるから支えて欲しい」という発言があった。その発言を受けて、どのような支えが必要なのか、必要な支えを知るにはどうしたらよいかを共に考え

ていきたい。

新井義雄（子どもを地域でサポートする会☆キラリン）

〈キラリンとは〉

足立区の教育委員会と共催・支援を受け障がい児・者への理解を深め、障がいの有無に関わらず。「共に支えていける地域」を実現するための、日常支援、移行支援、居場所作りを行っている。代表をはじめとして全員がボランティアで行っている。

〈キラリンのはじまり〉

1998年に「足立区障がいのある児童・生徒の地域活動促進事業」に足立区教育委員会が立候補し、事業運営としてうめだ・あけぼの学園おやじの会スタッフに依頼された。足立区障がいのある児童・生徒の地域活動促進事業実施協議会からキラリンに事業委託された。東京都学校5日制委託事業として5年、足立区教育委員会委託等で8年で満13年の活動である。

〈キラリンの生い立ち〉

父親が立ち上がり、家族でキャンプに行こう！そして仲間を作ろう！やる気があれば何でもできる！という父親たちの熱い思いから始まった。

・キラリンスペシャル 「ふれあい合宿」

教育委員会共催事業として、しょうがいのある子もない子も地域で生き生き生きていこうと区内広く募集し、総勢200名が参加した。しょうがい者と健常パートナーのペアを作り、電車やバスを使い1泊2日の家族旅行として日光や房総へ行った。

「学校に泊まろう」

近くでやろう、学校は避難場所になるのではないかと、城北特別支援学校で2001年より実施した。教育委員会事業として6年間続いた。

→東京都学校5日制委託事業が終了し、足立区教育委員会事業として継続が決まった。その際、目的を決めているいろいろな活動を行おうということで「子どもを地域でサポートする会」としてキラリンの愛称で発足した。

〈事業方針〉

生まれ育った足立で、いきいき、光り輝いて生きていける地域を作ろう。キラリンの事業PR、支援活動・移行支援、理解を深める、居場所作り、生きがい作りとして事業を行う。

〈活動内容〉

- ・PR活動、障がい理解を深めるために：ハートフル、サタデーピック、キラリンサロン☆六月、ボランティアと遊びに行こう、学校に泊まろう
- ・支援活動・移行支援、居場所作り、生きがい作り（月1回、会員制）：和太鼓、フライングディスク、音楽遊び、ジャズダンス、うどん教室、ワンダホー【ボランティアと遊びに行く活動】（休止中）
- ・キラリンは種まき事業であるため、事業の継続、新規、休止を毎年確認する。企画書から実現した事業もある。

〈問題点〉

1、定期的な場所の確保が難しい

毎月定期的に場所を確保する際の競争率が高く、場所の確保が難しい。また、参加者が増え、安全管理のため広い場所の確保が求められる。

2、支え合う仕組みの弱さ

「障がいのある児童生徒の地域活動推進事業」実施協議会が廃止された。事業のあゆみに伴い都から区の委託事業、共催事業として変化した。

事業運営費用も運営スタッフの行動力と参加者で支えている。運営費の3/4は福祉部の助成金事業で残りはキラリンで準備する（寄付金集め等）。また、一部は教育委員会共催事業である。

3、慢性的な担い手不足

主なメンバーは10数名で、メンバーの高齢化が進行中である。60名程度が年間登録して運営している。当初は実施協議会から派遣があり2000人以上の応援者がいた。実施協議会の廃止や組織からの

派遣者はその年度で終了してしまう。学生ボランティアも卒業と共に離れてしまうため、継続的な支援者は非常に少ない。

サポーター不足の対策として、定期的に区内の高校と連携をとり、高校生、大学生サポーターを起用している。また、和太鼓教室では保護者を運営スタッフとしてお手伝いしてもらっている。

〈キラリンからのお願い〉

スタッフ、サポーター募集中！！

◎2つの話題提案を受けて質疑応答

Q 最初の話題提案で後回しにしたままになっていた話があるが、その話をして欲しい。(同窓会のエピソードについて)

A 満井

井戸端会議のメンバーで卒業した特別支援学校の同窓会の係をしている人がいた。そのメンバーより、同窓会の企画を考えなければならなくて困っているという議題提案があった。それについて井戸端会議で話し合ったことがある。

II. 討議内容

参加者を10人くらいの小グループに分け、45分間くらいのディスカッションを行う。テーマは3つの中からグループごとに好きなテーマを選び(1つでも3つでもよい)ディスカッションを行う。

《テーマ》

- ・生きていくために必要なこと。
- ・私がやってみたいこと。
- ・悩んだときにどうしていますか？

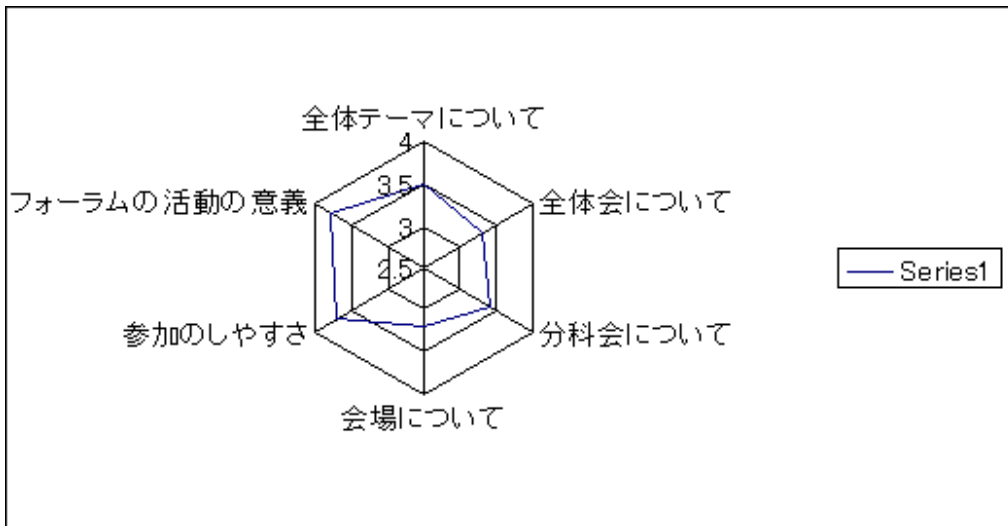
〈ディスカッションのまとめ〉

- ・井戸端会議のメンバー、スタッフ、保護者等様々な立場から話げできた。
- ・どう生まれて育てるか、どう生きていくかと考えると、いろいろ体験させて欲しいと思う。
- ・子どもにとって安心できる場所を見つけて欲しい。
- ・余暇活動でいい時間を過ごせることで仕事が頑張れる。
- ・いろいろなサポートを受けながら育つこと。愛されて育った子は強い。
- ・専門家ではない人が関わることも大切。ただ話を聞くだけでも助けになるんだと思った。
- ・ただ話す場を持つことや楽しむことが重要である。
- ・キラリンの活動はこれからも継続していき、仲間を増やしていきたい。
- ・生きていくために必要なのは、自分一人で外出できるようになること。母親に電車の乗り方などを教えてもらったから、一人で外出できるようになった。
- ・将来はヘルパーを使いながらいつかは一人暮らしがしたい(本人の意見)。
- ・障がいがあってもなくても、自分の思うことを口にしていくのは難しい。
- ・ヘルパー、ボランティアを育てることの重要さを感じた。
- ・寄宿舎に行くことで家庭生活が維持されている家庭がある。寄宿舎が廃止されるに当たり、代替りの制度・事業が必要だが、今現在代替りになるものはない。大切な物が脅かされているように感じる。
- ・親身になってその人の生活を考えてくれる人が必要である。今まではその役割は母親だった。生きていくためにそういう役割の人も必要。
- ・子どもは世間の人に理解しにくい、理解してもらえらるための活動を行っている。(保護者の意見)

アンケート集計結果

アンケート 集計結果

1. 回答数 第1分科会：27名 第2分科会：16名 第3分科会：21名 その他：17名
合計：81名
2. 職業（所属）
保護者、当事者、ホームヘルパー、ボランティア、教育相談センター、学生（大学院）
保育園、幼稚園
3. 今回の「足立 子ども・福祉フォーラム」は何で知りましたか？
うめだ・あけぼの学園・うめだ・あけぼの学園のホームページ・ちらし
パンフィックサプライのホームページ・医療雑誌・園長会での紹介・知人の紹介
の紹介・職場での紹介・区の広報など 井戸端会議の友達
4. 今回の参加は何回目ですか？
1回目－41名 2回目－13名 3回目－7名 4回目－4名 5回目－3名
8回目－2名 11回目－1名 12回目－1名 13回目－1名 19回目－1名



5. 全体テーマ「子どものしあわせを考えよう」について
 - ・いつも心において置かなければならない事だと思う。
 - ・子どもが自然体でいられ、3年後・5年後にあってほしい姿を目指して一步一步無理なく進める事が「幸せ」なのではないか。
 - ・子どもの今後について、考える機会になった。
 - ・自分の子どもの姿を何となく想像しながら見られることができた。
 - ・誰もが子どものことを真剣に考えていると思った。
 - ・園長先生のあいさつにもあったように多くの方、組織の方が、この目的のもと集まり、企画されたことがすばらしいと思った。
 - ・アバウト過ぎるテーマで具体性に欠けていたのでは。
 - ・好みが分かれる表現だと思う。感覚的な問題ですが、集員には大切だと思う。
 - ・とてもいいテーマだった。
6. 全体会「井戸端会議」について
 - ・井戸端会議参加型は良かった。
 - ・井戸端会議の雰囲気がよく伝わってきていたので良かった。（3名）
 - ・各々の夢を持っていらして、こちらも勇気づけられた。
 - ・子ども達（井戸端会議の人達）の姿に感動した。
 - ・大人になった方の意見が聞けて良かった。

- ・いい経験になったと思う。
- ・5年後について自分も考えさせられた。(3名)
- ・井戸端会議の活動は継続して欲しい。内容が乏しい気がするが、緊張を解す雰囲気作りにはなったと思う。
- ・全体会で井戸端会議をするのは無理があるかもしれないが、参加者に活動を認知してもらうにはいい試みだったと思う。
- ・一般の参加者に「知ってもらおう」という内容がよい。
- ・障がいのある方と一般の方が一緒に話が出来てよかった。
- ・参加意識を高める為の説明や、レクチャーがあってもよかった。
- ・(ビデオを利用していたので) 実際の話し合いや懇談風景を上映していただけたのもっと良かった。
- ・井戸端の雰囲気が出ていたのはとても良かったです。でも、少しただら感を感じていました。井戸端会議のメンバーがゆっくり話すのは良かったのですが、流れをもう少し工夫できたら良かったのではないかと。(2名)
- ・もう少し、支援者が説明したり、周囲を巻き込むような形にしても良かったのでは?
- ・当事者に任せてやっていくのは大事なことで今回の場は大切だが、ちょっと場が大きかったのではないかと。
- ・テーマと全体会があまりかみ合っていない内容に思った。
- ・講演会形式の方が良い。
- ・時間がかかり過ぎた。

7. 分科会について

第1分科会

- ・有意義だった。貴重な話だった。
- ・子どもが自然体でいられる学校選びに共感した。
- ・就学について考える機会をもらえた。
- ・色々な立場の話が聞けて勉強になった。(2名)
- ・先を知る、考えることの大切さを知った。
- ・話題提案の人選がよかった。
- ・実体験のエピソードがよかった。
- ・学校に入るまでに必要な点を聞いてよかった。
- ・具体的な質疑応答があつてよかった。
- ・現場の具体的な話が聞けてよかった。
- ・分科会を選んだ方のニーズに合った内容でよかった。

第2分科会

- ・とても良かった。自分が今知りたいことを知ることができた。もっと時間があつてもよかった。
- ・子どもの将来を考えるうえで、経験談が聞けて参考になった。
- ・話題提案者が多く、時間が長くて少し疲れた。話題提案は広く・浅くの印象だった。
- ・グループディスカッションの時間が短かった。
- ・話題提案で、学校側にも事例のような話があると面白かったと思う。
- ・自分の住んでいる自治体と比べて、羨ましく思った。
- ・(特別支援学校と普通学級の話があつたが) 特別支援学級の話がなかったのが残念だった。

第3分科会

- ・色々な立場の方々の話を聞いたことがとても有意義だった。
- ・グループに本人の方々がいない、お話が聞けなかったので少し残念だった。
- ・普段なかなか聞けない話だったので勉強になった。
- ・1つのフロアに3つの分科会はやはり無理があると思う。声が聞こえにくく、他の分科会の話が聞こえて集中できなかった。内容は良かったと思う。各グループに分かれて3つのテーマで話すのとまりにくかったので、1つに絞った方が良かったと思った。
- ・色々な話が聞けてとても良かったのですが、グループディスカッションでご本人さんが入らなかったのは残念です。キラリンのボランティアに参加してみたい。

分科会未記入

- ・個人の意見を重視しながら勉強している方が多いと思う。不安を持っている母親のサポートをもっとするべきだろう。
- ・各分科会とも内容はよく考えられていて話題提案者も主旨に添って分かりやすく提案して下さっていたと思う。
- ・時間配分がずれ第2分科会はディスカッションが不十分だったと思う。第1分科会もディスカッションがあつても良かったと思う。
- ・パネリストの3名の方々の話は熱意があり、参考になることが多かった。とてもためになり参加して良かったと思った。
- ・普段感じている悩みや相談をさせていただき、実体験を交えて教えていただき大満足です。
- ・具体的な話が多くとても参考になりました。
- ・もう少し時間が長い方が良かった。
- ・報告者の人選をしっかりとって欲しい。

8. 今年度から、会場が変更になりましたがいかがでしたか?(立地面、設備面、広さなど)

- ・ホールで声が響くため、分科会の時にパーティーションで区切るだけでは音が気になった。分科会を同じ

場所で行うには無理があると思った。分科会は、部屋を分けた方がいい。集中するのに労力を要するので、内容は良くても満足度はぐっと下がると思う。(多数)

- ・アピール度と交通の便からは良いと思います。又、全体会場としては、「満員」な感じでよいです。
- ・駅から離れているので、別の場所で開催して欲しい。
- ・区役所は、駐車場や駐輪場等施設が充実していて良かった。(2名)
- ・土曜の区役所は人も少なく、場所もわかりやすかった。
- ・広くて良かった。
- ・保育会場のうめだ・あけぼの学園からバスの送迎があり良かった。

9. 参加しやすさはいかがでしたか？(月・曜日・時間帯など)

- ・子どもを預けているので、少し長時間だと思った。
- ・仕事で参加できないの、土曜日ではない方がいい。

10. 足立 子ども・福祉フォーラムの活動は意義があると思いますか？

- ・このような会が19回も続いていることがすばらしいと思った。
- ・今だからこそ意義がより大きくなったと思う。
- ・今回の参加の意義は具体的な悩みの解決の良き場になったことだ。

11. 自由記述

- ・全体を通して良かったが、分科会の場所は別室にすべきだった。(多数)
- ・とても勉強になった。充実していた。(4名)
- ・初めての参加した。もう少し具体的なテーマだと質問・意見が出しやすかった。
- ・はじめて参加をした。また来年も参加したいと思った。(2名)
- ・やったという事実だけで満足してしまいたくない。子どもの幸せにつなげたい。
- ・議員の方が参加されるのはいいと思う。
- ・初めて会の存在を知った。
- ・井戸端会議の笑顔がよかった。
- ・楽しかった。また井戸端会議をしたい。
- ・色々な立場の人の話を聞く事ができてよかった。
- ・みんなと話し合う機会がとれてよかった。
- ・興味のあるテーマがあってよかった。
- ・何が幸せなのか考えさせられた。
- ・横の繋がり、仲間との繋がりを目的とするのか、横の拡がり、縦の繋がりを重視するのが難しい。
- ・障がいを持つ人の情報共有の場なのか、共に生きる為の情報発信の場なのかわかりにくい。
- ・当事者・関係者以外の参加を望む。
- ・どうしたら区民の方々にもっともこのフォーラムの事を知ってもらえるか。「障がい」に関係した方々以外にも理解して頂きたいことがたくさんある。リピーターの方々だけでなく新規の人達を増やしたいですね。企画委員やあけぼの学園の方々お疲れ様でした。ありがとうございました。
- ・悩みは1人で考えないで。相談は自分から！！自立に向けて支援する方向へ。
- ・足立区はすばらしいですね。娘が発達障がいかも？ということで悩み、インターネットであけぼの学園を知り、今回、台東区から参加しましたが、とても子育て事業に積極的ですばらしい区だと思った。
- ・あまりテーマを大きくすると開催者側と参加者側の考えが離れてしまう気がするのですが・・・ちょっと閉会のあいさつが気になった。
- ・19年の蓄積はなものにも変えがたく貴重な実績だと思います。微調整しながらも進んできた方向性、企画運営会議のあり方は間違っていなかったと思った。運営側も参加者側も熟したと思った。全体会に参加していないのでなんとも言えないが、井戸端会議の参加方法の変更も良かったのではないかと思う。特別支援教育や通常学級に少しずつ浸透し子育てシステムも転換して行ってこれからの5年間はより一層、幼稚園・保育園・子ども園、通常の小学校・中学校へのアピールと参加を促す内容、企画がフォーラムの使命だと思う。

感想

「足立 子ども・福祉フォーラム」に参加して

第1分科会：「初めての学校～“こころ”の準備、
はじめませんか？」

第2分科会：「学校に何を求めていますか？
～子どもは？大人は？」

第3分科会：「輝き続けたい！
これからの人生を自分でどう築いていくか？」

第1分科会<初めての学校～こころの準備、はじめませんか？> 感想

足立区障がい福祉センター 幼児発達支援室
谷川 さゆり

今年、フォーラムに企画委員としてはじめて参加しました。「子どものしあわせを考えよう」をテーマに、区内の関係機関が集まり、子どもの育ちを支える様々な立場から話し合い、子どもを取り巻く現状の問題を踏まえつつ、意見交流が行われました。

第1分科会は、<初めての学校～こころの準備、はじめませんか？>の企画会は、初めての「学校」、ワクワクするけれど「大丈夫かな?」「学校に行くまでにどんな準備が必要なのかな」等、子どもや親の気持ちに寄り添い、心配が希望に、不安が期待に変わっていきけるような、「明るく前向きな分科会にしていこう!」と毎回話が展開しました。「就学」についてのアンケートでは、たくさんの保護者の方にご意見をいただき、当日に向けて話題提案の見通しが持てました。

話題提案の井田先生からは、保護者と教員の立場で、ご自身の子どもの成長、学校での体験談を笑顔で話していただき、いつも心があたたかくなりました。秋山先生からは、学校の種類や特徴、課題などの情報提供をしていただき、企画委員で情報の共有ができました。資料は当日、第1分科会の参加者に配布され、今後の学校選びの参考になったと思います。また、保護者の立場からは吉村さんに、お子さんの保育園時代からの子育てで感じたことや何を大事にして学校を選択したかなど具体的に話をしていただき、これからも子どもや保護者の気持ちに寄り添って明日に希望が持てる言葉を、子どもの豊かな育ちを、丁寧に伝えていきたいと思いました。

フォーラム当日は、たくさんの方々に参加していただき、子どもの現状や就学のシステム、学校選びについて等の話題提案や質疑応答にて、様々な意見交換ができました。子どもの3年後を見据えた時に今すべきことを捉えていくことは、学校選びのポイントであり、また、挨拶や身辺自立ができること、困ったときにSOSが出せることは、学校生活を送る上で重要であることを聞きました。子どもの自信や自主性を育てていくために、今できることは何か、子どもの未来を見据え、様々な機関と連携しながら支援をつないでいくことの大切さを考える貴重な時間になりました。

第2分科会〈学校に何を求めていますか？～子どもは？親は？～〉感想

足立区教育相談センター
大山 美紀子

私は、フォーラムの企画委員として参加するようになって4年目となります。区教育委員会で特別支援教育を担当している者として、足立区の特別支援教育について、就学支援シート（チューリップ）、副籍制度、教育相談などについて、企画会議やフォーラム当日に情報提供してきました。

企画会議には、当事者や家族の方をはじめ、様々な機関の方々が参加しているので、そこで色々な話をするなかでネットワークづくりが進んでいると思います。フォーラムの意義は、当日を成功させることだけではありません。準備中に様々な方々が知り合い、話し合い、考え合い、その内容をそれぞれの立場で生かして地域づくりをしていくことが重要であると思います。

今回の第2分科会「学校に何を求めていますか？～子どもは？親は？～」では、企画委員の保護者の方々から、学校に対する本音の意見を伺うことができとても参考となりました。さらにフォーラム当日に、参加者との意見交換でも様々な意見が出され、これから就学する保護者の方に、経験者の保護者がアドバイスする場面もありました。

参加した一人ひとりが自分の考えを言い、他の方と話をすることで、お互いに何か一つでも得るものがあるようなこのフォーラムを今後も続けていきたいものです。そして、共に支えあうことのできる地域ができることを期待します。

第3分科会<輝き続けたい！

これからの人生を自分でどう築いていくか？> 感想

足立区福祉部障がい福祉課
高橋 暢行

第3分科会では「輝き続けたい！これからの人生をどう築いていくか？」をメインテーマに進行しました。

司会者より、フォーラムに至る話し合いの中で「本人達が輝き続けるためには、仲間、場、応援団が必要であるとの話があった」との導入の話があった後、話題提供が2つありました。一つは井戸端会議の変遷、何を一番大切に活動してきたかについてアンケートからの報告がありました。もう一つは、子どもを地域でサポートする会☆キラリンの発足の意図、また活動のねらいの変化等について話がありました。

その後、約1時間のディスカッションとなったわけですが、何も題がないと限られた時間での話は難しいと考え、企画会で11の話題を事前に準備しておき、当日はそのうち3つの議題について話し合いが行われました。3つの議題とは「生きていくために一番大切なことは」「私がやってみたいこと」「悩んだ時どうしているか」の3つでした。

10名程度の小グループになって、話し合いが行われたので話しやすいと感じました。また、障がいの有無、性別、年齢等、様々な方々と話げできたこともよかったことです。

3つの議題の中で私が特に印象に残ったのは、「悩んだ時どうしているか」という題で話し合った時のことです。悩んだ時、人に話をする、人に聞いてもらう、人に相談するといっている人が多いと感じました。やはり悩んだ時、頼りになるのは話し合える「仲間」なのだなと感じました。人は人に話をすることで、一人ではなくなるのだと感じました。そのような人と人とのつながりが、輝き続けながら人生を生きていくことの重要な要素なのだと感じました。

今回、このディスカッションに参加して、もう一つ思ったことは、私は今回の3つの議題のようなことを振り返って考えたことが最近、本当になかったということです。時間はアツという間に過ぎていきます。これを機会にいろいろ考えてみるのも大切だなと思いました。

<懇親会>

(これまでの足立 子ども・福祉フォーラムでは、井戸端会議のメンバーは懇親会に参加していなかったが、今回参加したいメンバーが全員参加できるようにした。)

井戸端会議
佐藤 亜美

2月5日足立区役所レストランピカールで打ち上げをしました。みんなで盛り上がりアラジンを踊りました。食べ物もおいしかったです。とても楽しかったです。